

令和2年度 表彰者紹介・授賞理由

木村賞

濱口 宗弘 氏（高知県立牧野植物園）

高知県立牧野植物園において約27年間にわたって、園地および植栽の管理のみならず、園地景観の造成に大きな役割を果たした。特に、牧野植物園の磨き上げ整備事業の大きな柱である2つの新園地の園地造成と植栽設計に主導的な役割を果たし、これを実現した。また、経験に基づく高度な栽培技術を発揮し、長江圃場（バックヤード）の責任者として、海外から収集した研究用植物や伝統的園芸植物コレクションの維持管理を行い、コレクションの保全と魅力的な展示活動をリードした。

植物園功労賞

櫻井 正治 氏（京都府立植物園）

長年に渡り京都府立植物園において、特に樹木の剪定管理や安全な樹林地管理などに従事するとともに、危険木の伐採・撤去など、2年続きの台風被害復旧にも貢献してきた。展示会では、盆栽臙々展やさつき展を担当し、展示会の質の向上にも努めてきた。また、剪定技術を解説する来園者へのミニガイドも好評で、多方面にわたり植物園事業に貢献してきた。

磯部 実 氏（広島市植物公園）

39年間にわたり広島市植物公園において植物の収集および栽培・展示、後進の指導などの業務に携わった。温室植物を中心に、栽培技術の開発、技術の継承に貢献した。1987年の世界蘭会議広島大会では展示会開催を担当し、ランの普及に大きく貢献した。日本植物園協会が行う海外植物調査に積極的に参加し、多数の新規植物を導入した。広島市植物公園大温室のリニューアル工事では計画段階から関わり、リニューアルを成功させた。

坂崎奨励賞

藤井 聖子 氏（高知県立牧野植物園）

高知県立牧野植物園において12年間にわたって園地管理の業務に従事する傍ら、牧野富太郎ゆかりの植物の基準標本産地からの収集、絶滅危惧植物の域外保全と魅力的な展示の実現による教育普及、国外での植物調査と植物導入、特に台湾からのツツジ属植物の導入、植物の個体情報管理システムの確立、ならびにそれに基づく展示ラベルの充実など優れた業績をあげてきた。また、牧野植物園50周年記念庭園、土佐の植物生態園などの管理においてもリーダーとして貢献してきた。植物園協会誌をはじめ多くの学術誌・書籍等で論文を発表しており、将来のさらなる活躍が期待される。

柳 明宏 氏（宇治市植物公園）

宇治市植物公園において 2013 年よりハナハスを担当し、巨椋池の蓮の収集、保全に取り組み、ナショナルコレクションの認定に貢献した。認定前より植栽展示やパネルでの解説、ハスのガイドなど普及活動を行っており、認定後はニュースレターへの寄稿や植物園シンポジウムでの講演など全国的な広報活動も行っている。地域の植物園として地元で根差した普及活動をさらに展開していくための重要な人材であり、植物園事業の将来を担っていくことが期待される。

保全・栽培技術賞

佐藤 裕之・赤井 賢成・徳原 憲・阿部 篤志（一般財団法人沖縄美ら島財団）

「サガリランの耐暑性に関する限界温度の評価」

絶滅危惧 IA 類に分類されているサガリランの生息域外保全のための増殖方法と栽培要件の一つが 30℃以上の高温を避けることであることを明らかにした。亜熱帯地域の植物であっても夏季冷涼な環境が必要なことは、今後の栽培技術の確立において大きな知見となる。

国立科学博物館筑波実験植物園

「シヨクダイオオコンニャクの 4 回開花」

国際的な絶滅危惧種であり、珍奇植物としても注目されるシヨクダイオオコンニャクを安定的に栽培し、同一株を 4 回開花に導いた栽培技術と管理体制が高く評価できる。